「太地３」プロジェクト
企画書

２００１年9月２８日

名古屋港水族館を考えるなかまたち
名古屋市千種区内山1-5-19
電話：052-745-1001

●提案

＜太地の３頭をリハビリ後、海へ返す＞

　１９９７年に和歌山県太地町で捕獲された３頭のシャチを名古屋港水族館に運び、本来の生息場所である海洋へ復帰させるの計画をシャチ購入・飼育にかえて提案します。

　３頭は、当時捕獲された５頭のうち生き残ったメス（推定７歳～８歳）２頭（伊豆三津シーパラダイス／太地町立くじらの博物館）とオス（推定６歳～７歳）１頭（南紀白浜アドベンチャーワールド）で、捕獲年２月以来、ばらばらに飼育されてきました。
　これまで、一旦切り離された群れが　一同に会した時に、どのような反応を見せるか、十分に観察されていません。また、一定程度人間との関係を離れてどのように彼らが関係を作って行くかという観察はまだされたことがありません。

　映画「フリー・ウイリー」上映後に主演のケイコを海にかえしてほしいとアース・アイランド研究所には数十万件の電話がかかり、その声がケイコを海にかえすための原動力にもなりました。太地の３頭については、当時捕獲に強く反対した世界中が復帰計画への強力な支援者となるでしょう。

　ケイコのリハビリ施設については、人気をあてこんで、いくつかの水族館が飼育に名乗りをあげましたが、結局はオレゴンに新たな施設をつくることで、ケイコのリハビリは開始されたのです。

　リハビリ期間中(約１～２年)は、離ればなれになっていた家族が再会した様子などを一般公開することは初の試みであり、環境教育としても価値があるし、また、話題性と共に学術的にも価値が高いと考えられます。

※太地での捕獲
　１９９７年２月、和歌山県太地町の畠尻湾にシャチ１０頭（家族）が追い込まれ、この内５頭が水族館に買い取られ、他の５頭は解放された。　同年６月、２頭が相次いで死亡。　現在の生存３頭。

＜リハビリ＞

　リハビリの中心となるのは、野生復帰した時に、自分で餌をとって生きていけるか、社会的な動物であるシャチが仲間を見い出すことができるかにかかっています。ケイコに関しては、捕獲された時が２歳で、その後１８年くらい狭いプールでショーをさせられていたことや、飼育環境が本来の北の海でなくて暑いメキシコであったことなどから、身体的な衰弱が甚だしく、リハビリの第一ステップは彼の体調の回復にありました。

　幸いなことに、太地の３頭については、まだ飼育期間が短いこと、すでに家族である個体が判明していることなど、ケイコにくらべて格段に有利です。

　リハビリの中心は、下記の内容が考えられます。

１、細菌の感染など継続的な健康チェック
２、ボーカリゼーションなどの２４時間モニタリング
３、早く泳ぐ、深く潜る訓練
　　（ケイコの場合、初めは２～３分間しか潜れなかったが、トレーニングにより２０分間潜り続けることが可能になった）
４、冷凍の魚でない生きた餌をたべられる訓練

　こうしたことを可能にするためには、ケイコを２４時間、音響や水中カメラなどでモニターすることに協力したマサチューセッツのウッズホール海洋研究所、カリフォルニア大学サンタクルーズ校生物学教室などの助言と実際に携わる研究者や獣医、たくさんのボランティアが必要とされます。

　ちなみに、ケイコがオレゴンの水族館で必要とした経費は年間２５００万円でした。名古屋港水族館は年間、死亡を予想して購入費だけでも５億円を用意しているそうですから、世論の後押しも期待できる時にこの費用は高いとはいえません。

●提案の背景

　現在進行中の名古屋港水族館二期施設の計画(大型海棲哺乳類の飼育・展示)について、計画発表当初より多くの自然保護団体・個人により計画の中止を求める活動が続けられ、１９９９年１１月にはロボットのシャチを導入することなど代替案が示され、「市民に喜ばれる水族館作りを」と考える名古屋港水族館は、私たちの意見を取り入れるました。
　一方、生きた個体の導入にも固執されました。計画通りに施設は完成し、ハンドウイルカとベルーガがコンクリートの水槽へ入れられ、開館を間近に控える事となりました。
　しかしながら、今回の計画の目玉と目されるシャチについては未だ導入のめどがついておらず、このままでは新しい水槽が、鯨類の飼育・展示に対しての安易な計画の象徴となり、名古屋港水族館が巨大な税金の無駄をしたというそしりを免れ得なくなりました。

　この間の私たちとの話合いやマスコミの報道を通じて、貴水族館がロシアにシャチ捕獲を依頼していた事実が明らかになりました。気象条件により今年度の捕獲活動は困難になってきましたが、来春には再開される可能性が残されています。

　海中での捕獲には専門的な知識を有するものがいないので、今回も負傷したり、死んだりしたシャチがいなかったか、懸念されています。捕獲作業の継続は、ロシアのシャチにとって、大きな脅威です。

　さらに、今回のロシアでのシャチ捕獲については、マフィアなどとの関係が強く疑われています。名古屋市ならびに愛知県の公的資金をそこに投入することを辞めなければ、非難の声が一層高まるどころか、厳しく責任を追求する必要性もでてくるでしょう。

　こうした状況の中、私たちはこの水槽を有効かつ前向きに利用する企画を考えましたので、ここに提案します。

　この企画は名古屋港水族館だけでなく、他のいくつかの日本の水族館と専門的な機関、獣医師、ケイコのリハビリに携わった人たちの協力を必要としますが、実現させれば、日本の水族館が世界中の称賛を受けるでしょう。
　どうか、この企画について前向きなご検討と取り組みをお願いします。

●資金と宣伝

１、太地３解放基金（仮称）を設立し、世界中に呼び掛ける

２、シャチの里親制度（アダプションプログラム）を設け、３頭それぞれのリハビリまでの経費の一部を負担してもらう

３、スポンサーとなる企業等を募集する
（例：グランパスなど）

４、テレビ局と契約し、リハビリの全行程を中継、ドキュメント番組を制作する
海外にも独占的に中継できる

●意義

映画「フリー・ウィリー」のケイコは、大勢の人の熱意と努力によって、狭いコンクリートの水槽から生まれ故郷の海へとかえりました。　当初の目標を100%達成したとはいえない状況ですが、劣悪な環境の中で、皮膚に病気を持ち、水に潜る事すら満足にできなかった事を考えれば、十分な結果といえるでしょう。
ケイコにとって最も大きな問題だと考えられていたのは、家族がわかっていない事でした。　シャチは長年の野生での研究から、一生を家族と共に過ごす事がわかっています。

太地の３頭の場合はケイコとは随分ちがいます。まず、３頭が家族なのです。　幸いにも、捕獲されてからそれほど長い年月が経っていないので、再会してもお互いを認識する事は難しくないと考えられます。
しかし、再会した時にどう反応するか、リハビリ期間中に家族としての姿を観察できるか。　また、海へかえす時には、小型の発信器を使い、回遊地域や１９９７年に離れ離れになった家族との再会の有無など、野生での研究や水族館の限られた場所ではできない、過去に例の無い、学術的に大変貴重な機会となるでしょう。